はじめに

幸福というものはそれぞれの価値観によって異なるが、まず平穏無事に生きられることが前提であって、子どもや経済的な事柄はその次の問題であろう。

とすると、本書の「環境と平和」というテーマは、人間が生きる上で極めて大切な幸福の成立基盤ということになる。しかし、近年にわかに世の中が狂い始めてきた。

時あたかも各地でテロが勃発し始め、食の安全が脅かされ、感染症、環境問題などの不安と恐怖が地上を覆っている。われわれは、豊かさどころか絶滅寸前の時代を生きているのかもしれない。いうなれば、これは人類の存続か壊滅かが問われているという

ことである。

出家して四十年。偉大な力に導かれて慈悲のまね事のようなことをやってきたが、いよいよ仏陀のこころを社会に伝える時期が到来したように感じる。

思うに、近代化を担ってきた欧米思想が今ほど問われている時代はない。たしかに、この思想は進歩をもたらしてくれた。しかし発展の陰には倫理喪失、弱肉強食の狂わしい現実がもたらされている。

もとより自由と民主主義に異論はないが、大国の論理を小国に押しつけ、その結果として抵抗感情が果てしない憎しみの連鎖を招き、多くの人が血を流している。これは国益という欲望の炎が人間本来に備わった哀しみとぬくもりを焼き尽くそうとしているという証左である。これを哀しみの世といわずして何と言おう。

地上はあまりにも深い混迷の闇に覆われてしまった。この闇は人間の合理主義、おごり、エゴイズムが放つ悪玉の吐息のようなものだ。さらに、本来はその愚さを教え諭すべき宗教に充満するエゴイズムもある。

だが、わたしはこの現実を究極の真如の世界に引き上げることが仏教徒に課せられた責務と考えるのである。仏教には人種・民族・国家を超え、世界同胞の幸福と平和を示

唆する精神哲学がある。

目を転じれば、世界には貧困と抑圧、無理解と不公正に苦しんでいる無数の群像がある。一般的に、豊かな人々は約二十ヵ国の十五億人、それに対して貧しい人々は約百七十ヵ国の四十五億人といわれている。

国際政治の使命は、このような陽のあたらない世界の谷間に光を注ぐことにある。絶望の闇を歩む人々に希望の光を与えなければならない。対立のない和やかな地上を創造しなければならない。

自由と民主主義は、本来カネを生むためのものではなく、差別と貧困、抑圧と闘争とは無縁の社会をつくることにあったはずである。そのような調和ある世界をもたらす仏教という精神哲学と、核被爆という歴史的試練が日本にもたらされてきた。世界もまた共存共栄を可能にする新しい思想哲学の柱を待望している。

近代化を担ってきた欧米の思想は、人間と自然、物質と精神、宗教と科学、環境と経済など物事を対立して見るが、これはもはや限界であろう。対立するものを統合して循環する円の中に組み入れていく仏教の「法輪（ほうりん）」と「和合（わごう）」の思想を二十一世紀の精神軸と定めなければならない。なぜなら自然をはじめとするすべてのものは「循環と調和」

から成り立っているからである。仏教は共生する自然智の開悟（かいご）に起こされたものである。

「平和の法則」と名づけた本書は、環境と平和についての二部構成としたが、この二つの問題は、要するに循環と調和の法則を無視した人間欲望の暴走の結果だ。

本書の提言がすぐに実現されるとは思わないが、おそらく国際社会が平和共存のルールについて再考し、国際政治の求心力として新しい国連の機能を求めようとするとき、仏教の示唆する哲学がクローズアップされるようになるだろう。

世界の新しい秩序を宇宙と自然の法真理に基づいて定めるという大胆な発想の割には、国際政治の専門家ではないので、内容の稚拙さは勘弁願いたいが、出家以来、わたしが懐に温め続けてきた研究の成果である。平和共存のヒントになればいい。

平和の法則●目次

はじめに……1
第1話　宇宙と自然のコスモロジー……11
ふるさとの水辺……12
森がうまい酒を生む……18
わたしたちが失ったもの……22
食べられない哀しみ……26
「化学病」という魔病……29
「罰あたり」循環の法則……34
近代化の「犯罪」……36
エネルギーの確保……41
幸福の成立基盤……45
循環と調和の法則……49

第2話　偏見なき平和共存……55
異常に駆り立てる戦争……56
晩夏の電撃……62
感情の衝突……68
戦争の大義……72
「パックス・アメリカーナ」への抵抗……81
無理解と不公正……86
熱狂的信仰が失わせる「バランス感覚」……90
理由なき偏見と憎悪……100
第3話　仏陀の平和観……107
仏陀を生んだインドの原風景……108
政治と無縁でいられなかった仏陀……111
「宿縁」によるシャカ国の滅亡……115
侵略を止めさせられた仏陀……119

「己を愛す者は他を害うべからず」……123
聖徳太子の仏教主義……126
仏教徒の持戒と実践……129
非暴力主義……135
戦争のむなしさ……142
第4話　神秘預言に見る終末論……147
わたしの神秘体験……148
仏教経典に見る終末論……154
コーランの終末預言……160
第5話　仏教徒の人々へ……165
国際化の時代を迎えて……166
仏教徒の平和選択……169
現実と理想の苦悩……174

自衛権と大量破壊兵器について……178
第6話　仏教国日本の平和戦略……185
単独行動の限界……186
求心力としての国連機能の強化……190
安保理組織の改革……195
日本、常任理事国入りの道……199
第7話　心の家づくりから世界の家づくりへ……203
共存共栄の叡知……204
平和活動の原点……207

第1話　宇宙と自然のコスモロジー

宇宙と自然のコスモロジー

ふるさとの水辺

高度経済成長期、地域発展の名のもとに山峡や田園が無謀に開発された時代があったが、不景気になって出てきたのは「自然にかえろう」という思考。だが、わたしが住んでいる佐賀県は昔から自然が残っている。

昨年、「はなわ」が「佐賀県」という歌をヒットさせた。佐賀県庁の職員さんたちが「あん、ふうけもん（ばか者）が…」と眉をしかめたところ、就任したばかりの日本一若い知事はこれをたしなめ、佐賀県をアピールする話のネタにしたというから、都会に媚びない明るさに感心させられた。

その頃、わたしは佐賀の風土を題材にしているコラムニストの酒井民雄氏と「ふるさ

と」について対談をする機会があったが、その中で彼は、「佐賀県は開発から取り残されていたからよかった。そのために『吉野ヶ里』という遺跡が手つかずのまま残っていたんですよ」と語っておられた。

吉野ヶ里遺跡は工業団地になる予定だった田園地帯で発見された。あわててストップしたから間に合ったが、もともと先祖伝来の土地に固執する県民思想が乱開発を防いできたわけである。佐賀県は保守性が強い。だからこそ、はなわが唄うように「一面田んぼだらけ。まるで弥生時代」ということになった。

わたしのふるさとは佐賀県の「厳木」という町である。

厳木という名前は全国でも珍しい地名の一つらしく、「いわき」、「げんき」などと呼ばれることはあっても、「きゅうらぎ」と読める人はまずいない。太古の昔は霊木とも呼ぶべき巨木に覆われた一帯だったためか、何でも「浄木（きよらぎ）」という言葉から転音されたものらしく、それに「おごそか」の「厳」をあてたといわれている。

「はなわ」は県東部の出身だが、厳木は西部。玄界灘に注ぐ松浦川の上流にある山間地であり、ネオン一つない場所だが、それでも子どもの頃に慣れ親しんだ土地には懐かしいぬくもりがある。

山裾をくねるようにして走る厳木川の河川敷には、気が遠くなるような年月をかけて浸食された砂岩の広大な岩瀬があり、そこに点在する無数の穴にはハヤやドジョウやメダカがいた。大雨で水かさが増すと岩瀬まで氾濫し、天候が回復して水が引くと穴には小魚たちが取り残された。

子どもの頃はこの岩場が絶好の遊び場だった。ジリジリと照りつける太陽の下でかしましい蝉時雨を聞き、水に戯れる鮎やハヤの軽快な動きを見ながら、泳いだり、潜ったりして雲が茜色に染まるまで水と親しんだものだ。

この厳木川には昔から無数の鮎が唐津湾から遡上する。鮎が多いのは天山水系からわき出る水が清く、うまいからである。川底の石を観察すると無数の「はみあと」がある。鮎は春に川をのぼり、石についたコケを食べて成長する。そのコケが鮎の香りとなるから、鮎のことを「香魚」とも呼ぶ。厳木の鮎たちも秋の産卵期までは厳木川で暮らし、孵化した稚魚は二十キロも下流にある唐津湾に下って成長する。

そんな厳木川の汚染が進んできたのは高度経済成長期からだ。一時期はＤＤＴやホリドールという農薬がアメリカから押し寄せて、多くの小魚たちを死滅させ、次第にわれわれを川遊びから遠ざけてしまった。

化学物質によってハゼ科の魚がまったく姿を消してしまったと思っていたら、中学時代の同級生から「まだ、おるおる（いるいる）。下流にはおらんばってん（いないけれども）、上流にはビッチン（ボウズハゼのこと）、ジョウトク（マハゼのこと）などハゼ科の魚がいっぱいおるばい」と聞かされた。

彼は独身を謳歌する、いわゆる「独身貴族」である。およそ優雅さなどとは縁遠い男だが、仕事が引けた夕方や休日になると一人で川に出かけ、一日中腕を組んで釣糸を垂れ、夏には鯉を抱くために淵に潜る。五十歳をとうにすぎたというのに、よくそういう童心を持ち続けていられるものだと思うが、最愛の母を亡くした彼にとって、故郷の川だけが童心に戻れる唯一の母胎なのかもしれない。

そんな厳木川を改修してほしいと町の長老たちは関係省庁に陳情しているという。財源がないと断られたらしいが、幸いなことである。コンクリートブロックの護岸などに造り替えられてしまえば、魚はねぐらを失い、死滅してしまう。

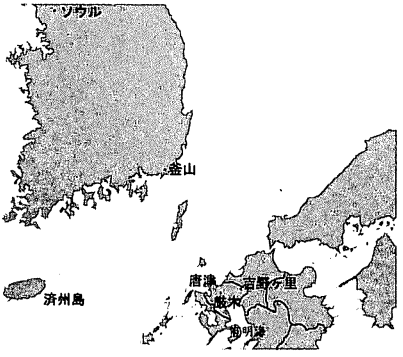
そんな情のないことをやるのは、おそらく川に潜った経験がないからであろう。鯉は川ぶちの草の下や岩穴を好んでねぐらにしている。あの暗い場所でギラリと光る鱗を国土交通省河川課の諸君にも見せてあげたい。

＊

この地域は松浦、昔でいうなら「末盧の国」にあたる。

中国の史書、『魏志倭人伝』には、「一海を渡ること千余里、末盧国に至る。四千余戸有り。山海に濱して居す。草木茂盛し、行くに前人を見ず…」とある。

末盧国の「四千余戸」とは今の唐津・松浦一帯にあった住居数と思われるが、厳木など「草木茂盛し、行くに前人を見ず…」ということからして、深い原生林に覆われた地域だったのだろう。



『魏志倭人伝』が書かれた時代は三世紀頃。中国では魏・呉・蜀の三国が覇権を争い、日本は邪馬台国の女王・卑弥呼の時代であった。魏は蜀を牽制するために日本の卑弥呼と手を結んだ。

こうした「国際交流」の歴史は、『魏志倭人伝』より、はるか以前の弥生時代にまでさかのぼる。もともと九州は大陸とのきずなが深く、大陸の文化を色濃く残す弥生遺跡が無数にある。「吉野ヶ里」などはその代表的な環

壕集落遺跡である。

県の北西部にある唐津という街は大陸から訪れる人々の玄関口だった。大陸の古代人たちは「笹原」という峠を前にして、その間道沿いにあった厳木でしばらく休んで、山海の珍味にあふれた吉野ヶ里や有明海に向かったにちがいない。

唐津は朝鮮半島をにらむ日本の軍事拠点でもあった。

西暦五三七年、安閑天皇の命を受けた大伴狭手彦は高句麗、新羅から朝鮮半島の任那、百済を救うために兵を率いて松浦へやってきて軍船、食糧などを調達しようとした。厳木には軍船建造に必要な大木が林立している。天山や作礼山から流れ出す清流に乗って二十キロも下れば唐津の浜である。この大木を川に浮かべて運び、唐津の浜で船を建造すればいい。狭手彦はそう考えたにちがいない。

その頃、狭手彦は、「篠原の長者の娘」・松浦佐用姫と運命的な出会いをする。二人は恋に落ちて将来を誓い合うが、軍船が完成すると狭手彦は大軍を率いて出帆する。佐用姫は鏡山（領巾振山ともいう）にのぼり、はるか眼下に船出していく夫を見送る。ちぎれるほど袖を振り、涙がかれ果てると、そのまま石になったという。

この高台からは玄界灘に注ぐ松浦川の流れが光に映えて天女の羽衣のように輝いて見

えるが、厳木はずっと上流に位置する佐用姫の生誕地であった。

森がうまい酒を生む

厳木の山里に面白い窯元がある。

この家の主は独特の感性を持っていて、コーヒーの木の釉薬でコーヒー椀をつくったり、窯の火で天然酵母のパンを焼いたりする。パンは全国発送するくらい人気があり、奥さんの手料理もうまい。飼っているヤギの横で彼は「自然」について語り始める。要するに生き物とのコミュニケーションが大好きなのである。

厳木にバイパスが通ることになり、町境の山奥に引っ越された。陽あたりのよい高台でパンを焼いたり、焼き物をつくったり、都心部から訪れるお客さんと語り合ったり、夜は星を仰ぎながら音楽会もひらくという。

中学生だった昭和三十年代当時から、「自然保護の会」らしきものをつくっていたというから、本物の自然派である。木陰のイスに腰かけながら、彼は川や森をよみがえらせなければならないと、魚のこと、ホタルのことなどわたしに熱っぽく語ってくれた。

彼は言う。ホタルの幼虫は「カワニナ」という小貝を餌にするが、このカワニナは酸素やミネラル分の多い流れでなければ生息できない。だから川を浄化する必要があるが、そのためには、まず森を手入れしなければならないのだと。豊かな森は豊かな川を生む。要するに、「循環」が大切ということである。

「この場所をもっと野趣的な場所にしたかばってん、そのためには時間がかかるよ」

新しくこしらえた別天地であるため、作為的な力ではひなびた味わいを出すことはできない。だからといって野放しでもいけない。この微妙なさじ加減がむずかしいのだろうが、彼は人間を自然の外に置かないという一種の哲学を持っている。

天山や作礼山を水源とする清流の恵みに育まれた厳木町の人々は、昔から川を愛し、植林をしながら、ささやかに暮らしてきたが、低コストの外材が出回るようになって林業だけでは食べていけなくなった。

そこで若者たちは街をめざし、老人だけが取り残された村では間伐や下刈りがおろそかになって山が荒れ始めた。適度に間伐するとうららかな陽が差し込み、風通しが良くなる。そうすると木は太り、枝も茂る。そこでまた日陰になるから間伐や下刈りをする。木というものはそれを繰り返しながら辛抱強く育てていくのだ。つまり、自然を守るた

めにはある程度人間の手を加えなければならないのである。
昔の人は知恵があった。カズラが樹木の幹を這いのぼり、太くなると枝を曲げ、そこに雪がのしかかると折れてしまう。ナタの先にへこんだ部分があるのは、そのカズラを引っかけるためであるが、伐採、運送、製材などのコストを考えると割が合わなくなり、それも今では無用のものとなっている。

*

そんな会話をしていると、彼は木のテーブルの上に「天山」という純米吟醸酒を運ばせ、「今度、チョウザメの丼ぶりを食べに来んね」と、酒をつぎながら言った。
何と、こんな山奥でチョウザメを飼っているというのである。促されるままに付いていくと、すぐ側の池の中に長さ一メートルほどのチョウザメがうようよ泳いでいるではないか。驚いていると、彼は言った。
「チョウザメは北に多いけれど、産卵期には川を遡上する。それがここの水質と適合しとっとやろうね」
卵巣の塩漬けはキャビアと呼ばれている。その丼ぶりがいかなる味かは知らないが、サメを山で飼うとは奇想天外なことをする男である。

ここにはムラのたたずまい、せせらぎの音、木々の梢を通して吹き渡る風の匂い、流れる水や雲、鳥のさえずりや風の音など、視覚や聴覚、嗅覚を通して心を洗ってくれる安らぎがある。こんな所で呑む地酒のうまさは格別で、最高の贅沢だと思うが、水がうまいから米がうまいし、酒もうまくなる。こういう生活をあたり前のように楽しんできたのがわれわれの先祖だったのである。

都会では人間が時間に支配されているが、田舎では時間が仕事を教えてくれる。梅の花が畑を耕す時期を告げ、アヤメが咲く初夏はそこに豆をまく季節を教える。

日本人には自然と共に生きる気風があった。暗い森の中では自然に目が生命の成長や心の動きに向かう。春夏秋冬それぞれの趣の中で暮らす日本人に繊細でナイーブな人間性が育まれたことを誇りに思う。

けれども明治以降、欧米の文化に心酔して経済発展ばかりを求めてきた結果、日本は大きく変わった。戦後は高度成長を背景に、山を、谷を、川を跨いでレジャーに急ぐ人々や物流のトラックのために、コンクリートやアスファルトの道路が造られた。

「国破れて山河あり」というが、何のことはない。欧米にならった日本が失ったものは、日本の心ばかりではなくふるさともその一つで、国破れた上に山河まで壊してきた

ことになる。

自然を征服しようとする欧米の思想的特徴は、自然を一つの「対象物」としてとらえようとするところにあるが、そもそも自然は分離されるものではなく、自己と一体化しなければならない。人間も自然の一部。そもそも単独で存在しているものなどこの世にはない。

今、わたしはお寺の裏山に「ほとけの里」と名づけたユートピアを建設している。平地を造る必要から樹木をずいぶん犠牲にした。木は倒れるとき、哀しい悲鳴を出す。せめてもの罪滅ぼしに約千本の苗木を植えた。やがて、成長してうまい水が谷に流れ、沢ガニやクレソンたちを喜ばせてくれることだろう。

わたしたちが失ったもの

「ほとけの里」をつくろうと思い立ったのは、社会に適応できる青少年を育成するためである。若年層の凶悪犯罪が増加しているのも自然にふれる機会が少ないからではないか。人の目つきが変わってきたのも高度成長期の頃からだった。

わたしはときどき福岡県の矢部村という山峡に遊びに出かけていく。ここは女優・栗原小巻さんのふるさとでもある。人口わずか二千人足らずの山村であるが、「杣人（そまびと）（きこり）の里」とも呼ばれている。

唸（うな）りたくなるほど山また山の場所であるが、実に純粋で素朴な人々が多い。驚いたのは、知らないわたしに「こんにちは」と、明るく大きな声であいさつをする子どもたちがいることだった。

矢部の子どもたちはとても親思いが多い。林業の村だから、今でも山から馬で木材を運び出しているが、木挽（こび）き歌を唄いながら、父親が切り出した木材を引く馬の手綱を握る。「大きくなったら父親の後を継いで木こりになるんだ」と語る。今の時代になぜこんなことが言えるのだろう。少し前の話だが、矢部の小学校の先生が子どもたちを初めて海に連れて行ったとき、海の広さに感激して涙ぐんでいた子がいたという胸が熱くなる話である。

人間に「川魚」と「海魚」という二つのタイプがあるとすると、ここの子どもたちは純粋な川魚、しかも渓流にすむ稚魚のようなものだろう。栗原小巻さんという人は笑顔が美しく、礼儀正しい人物らしいが、要するに自然というものはそういう人間性を育む

「生産地」なのだ。
わたしが子どもの頃は自然の中で遊びを創造し、人間関係もそこから学んだ。頭がいいとか、悪いとかいうことは大した問題ではなかった。今、山や川で遊ぶことを勧めると、「虫に刺される」、「塾だ、勉強だ」と言う親がごまんとあふれている。
人間は自然の中で暮らすと、ゆとりや思いやりの心がたくさん育まれ、礼儀正しさにつながっていく。それはおそらく山河が人間を素直にかえす霊気を放っているからではないか。山河の風景は時折、神々しい美を醸し出すことがある。そのときわたしは自然に「神」を感じとることがある。今、わたしも都会の子どもを四、五人ほど預かっているが、ずいぶん目つきや言葉づかいが良くなった。
ところでこの矢部村。国道から少しのぼった所に「杣人（そまびと）の家」という山菜料理を出してくれる店がある。築齢二百年ほどの古民家であるが、元村長さんや教育長さんがそこでわたしを歓待してくれた。人情味が厚く、人なつっこい人たちばかりである。彼らは「へき地だからいいんですよ」とこの村を誇りに思っている。
この村にはスーパーなどという「文明的」な店はない。なにせほとんどの村人が畑を持ち、もらったネギのお返しに白菜を、ニンジンのお返しに山芋をという習慣がまだ残っ

ている場所だから、あえて買う必要がないのである。釣糸を垂れればヤマメもマスも釣れる場所だから動物性タンパク質の心配もない。

だが、最近ここにも、「グリーン・ツーリズム」のブームに乗って都市部から人々が「癒し」を求めてやって来るようになった。コミュニケーションの場が整備されると、「安らぎ供給の基地」へと変貌する。

都会の人が田舎に足を運ぶのは一種の自然回帰現象であろう。都市とムラの住民との交流が活発化するのは喜ばしいことだが、その一方でムラの生態系や純朴さが脅かされることへの不安もないわけではない。

途中の山道に、「あんたのいらんもんは、うちもいらん」という看板が立っていた。車の排気ガスはともかく、ゴミクズ、空き缶。ドライブを楽しむのはいいが、そこに住む人々の身にもなってみることだ。

食べられない哀しみ

怪しくなってきたのは食糧である。

「BSE」が発生して以来、全国の肉牛生産農家は不安を募らせているが、今度は「鳥インフルエンザ」なるものが流行し、ベトナム、タイ、韓国、日本などアジア各地で猛威を振るった。

国連食糧農業機関の調査では、豚の鼻の粘膜を採取した標本から鳥インフルエンザの陽性反応が出たという。豚の体内で人と鳥のウイルスが交じる「交雑」が起こり、人への世界的な流行につながる新型ウイルスが生まれる可能性もあるという。

専門的なことはわからないが、鳥インフルエンザは通常、人には感染しにくいといわれながら、東南アジアなどでは亡くなった人もいる。感染経路がわからない上にワクチンがないというから、これではまるで伝染病の「同時多発テロ」である。

牛、鳥、豚が食べられなくなり、海洋汚染によって魚までがダイオキシンに侵されるとなると、動物性タンパク質にならされてきた人間にとっては何とも口さみしいものがあるが、「無認可香料」、「無認可添加物」なるものの摘発などを含めて、このところ食材に関する危機感は年々募ってきている。